

『いっしょにJFLへ!』

レッズ、アルディージャに続く 第3のクラブ
「さいたまSC」 秋山健二監督に聞く



PROFILE
秋山健二

1968年生まれ。浦和南高校から東京学芸大学へ進み、埼玉教員サッカークラブに選手として在籍。2000年度はヘッドコーチとしてチーム躍進に貢献。2001年度より監督として指揮を執る。

歴史は紡ぐものである。時間が経てば、自然に積み重なるもの、でもない。そこには先達の人々の思いがあり、喜びも悔しさも語り継がれてきたものがある。多くの人たちが関わる中、時間とともに、より意味のあるものになっていくのだ。

さいたまサッカーライブは、1953年、国民体育大会・教員の部での優勝を目指して結成された「埼玉教員サッカーライブ」として創設され、今年で56年目を迎える。国体優勝17回、日本リーグ2部に在籍経験を持ち、「サッカー県埼玉」の象徴として一時代を築いた名門クラブである。

2000年から教員以外の選手にも入つてもらえるようにと「埼玉サッカーライブ」と名称変更。さらに07年、クラブの目標としてJFL昇格を掲げ、08年にはより地域密着を目指すためにホームタウンを「さいたま市」とし、現在の「さいたまサッカーライブ」(以下、さいたまSC)となつた。浦和レッズ、大宮アルディージャに続く、県内第3のクラブとなるべく、高い志を持って関東リーグを戦っているところだ。

——クラブ名を変更し、JFLを目指に挑んだ2年目のシーズンはどういう1年だったのでしょうか。

「まずは伝統的な力が、改めて出てきたなという印象を持ちました。選手の質としては、他のクラブにいる選手の方が経験などを見ても、遙かにいいと思います。ただ、この1種、社会人で戦うというのは、精神的なものに負うこと大きいのです。今年も厳しい戦いではありました。位とも大きな差ではなく戦うことができたのは、脈々と受け

継がれる伝統があつて、選手たちに伝わっているのだと感じたのです。

その中で今年は、JFLを目指すためにも、メンバーを固めて試合に臨みました。結果を求めるに同時に、選手たちの方向性がブレないように心がけました。これまでには全員が同じトレーニングをして、試合に臨んでいましたが、結果を出すことで若い選手たちに食らいついてきてもらいたいと思つたからです。

もう少し前までは、試合に出る選手も、運営に携わる選手、水を運ぶ選手もイコールと考えていました。いる選手の中で、たまたま今日の試合での役割が違う、という考え方です。ただ、これでは限界があると思ったのです。ザスパ草津や町田ゼルビアなど、関東リーグを抜けてJリーグ、JFLに行つたクラブを見ていると差があるのです。そのためにはクラブ全体の底上げが必要であり、今、そういう階段を上ろうとしているところだということです。関東リーグを飛び出するためにも、我々の中でもう一押しが必要なのです。ただ、JFLに行けば、また以前のように「たまたま」という感じ、雰囲気の中でクラブを運営していくことは思つています」

